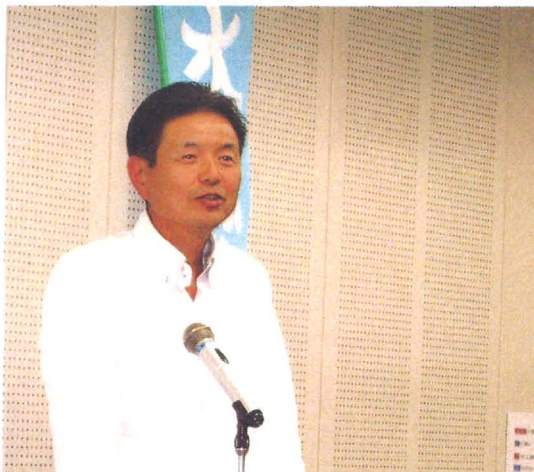


みんなの会総会 & 「上下流交流・連携の集い」報告

2017年9月30日午後1時過ぎから、「第8回総会」&「上下流交流・連携の集い」を名古屋市中企業振興会館で行いました。

2016年度活動報告および会計報告、木曾川流域水源の里基金、木祖村での大豆づくり収支報告、2017年度活動計画・予算提案を代表・河崎、事務局長近藤から順次行い、原案通り可決・承認いただきました。役員人事は2016年度に改選されたメンバーが2年目を迎えることとなりました。

そして、2018年に10周年を迎えるに当たり、これまでの活動を総括し今後の展望を発信・共有する場として、記念のイ



ベントを行いたいと代表から表明がありました。来年上半期中に木曾6町村と飛騨川流域各町村を訪れる計画をしております。これまでの取り組みをさらにステップアップしていくために、そこで様々

な提案をさせていただきながら話し合いの中で実現への道筋を作っていきたいと考えています。10周年イベントでは、その提案の一つでも多く取り組み始める表明ができればと考えております。

「上下流交流・連携の集い」では、木曾町の原久仁男町長＝写真＝にお越しいただきました。お話ししていただいたのは下記の内容です。

御嶽山噴火から3年を経て今なお、風評被害から観光事業が噴火前レベルになかなか戻らない厳しい現状があります。過疎・高齢化が進む中で、「木曾町まち・ひと・しごと創生総合戦略プロジェクト」を立ち上げました。

なかでも「再生可能エネルギー活用推進プロジェクト」では木曾の重要な資源である森林・木材を活用することを謳っています。「木育」をキーワードに町で生まれた子どもたちが生後5カ月や1年経ったときに、木製おもちゃをプレゼントします。また、木質バイオマス燃料を開発・利用推進して、木材関連産業の育成・発展に加え、町民に国産燃料への切り替えを促して「燃料自給率アップ→燃料費が町外へ流出するのを防ぐ→町内で流通するお金を増やす」ことで経済活性化を目指そうとしています。

最近注目度の上がっている「すんき漬」に着目し、産業育成と域外への利用促進に取り組んだり、高齢化や耕作放棄地・後継者不足など様々な問題を抱える基幹

産業の農業の持続的発展への取り組み等、木曾町「地方創生」は全部で13項目の重要課題になっています。

このように原町長のお話は、前へ進もうという強い意欲を持って取り組んでみえる姿勢が感じられました。

その後、参加されている上下流の方々に登壇いただきました。①木祖村商工課の東さんからは名古屋市昭和区にある「桜山アンテナショップ」での取り組みや新しいお酒「味噌川」の紹介など ②小池糰店の唐沢さんからは、木曾町で味噌・糰を作る傍ら、音楽祭や木曾手仕事市などの広範なまちおこし活動 ③飛騨川流域・七宗町の土屋さんから、地域おこし協力隊での活動を通してのまちおこ

し活動 ④木曾広域連合地域振興課の大島さんからは、木曾青峰高校インテリア科の高校生のベンチや木製玩具の贈呈などでみんなの会とは2009年からの付き合いで、これからも交流・連携を進めていきたい ⑤21インコーポレーションの砂山さんからは、交流を通じた横のつながりの意義や木曾の自然に感謝しており、その「ミネラル・ウォーター」の売り上げの一部を水源の里基金に拠出しているなどの取り組み ⑥下流域からでは、シェアリング・ライフの杉戸さんから、農福連携事業を上流域で立ち上げたいというビジョン=3頁参照=を、それぞれアピールしていただきました。

(事務局 鈴木)

長雨や台風に苦しめられた今年の大豆作り

～地元の人びとに助けられて～

今年の秋は、雨に悩まされました。

収穫の時は2週にかけて台風の影響を受けながらも何とかやり遂げることが出来ましたが、その後も何日も雨が続き殻たたきの予定も延ばしてきました。ここにきて急に雪が残るようになって、このままではいつ殻たたきができるやら、ということで、急ぎよ行うことになりました。

いつもお世話になっている笹川さん夫妻と地



元の方が応援に駆け付けてくださり、11月28日の朝9時から始め、午後4時頃に殻たたき=写真=が終了しました。感謝、感謝です。

全体の収量は、全体で7～80kgだと思えます。ただ虫食いが多く、特に黒豆は厳しいです。今回は大豆の選別を上松のライスセンターにお願いできることになりました。来年の種とみんな楽作隊の方たちの配布、販売分を除いて味噌に仕込みます。

今年度の大豆作りは5月の種まき、6月の苗植え、夏の草取り、味噌の天地返し、そして草取り。

枝豆の食べられる時期までは順調でしたが、トウモロコシはイノシシに食べられ全滅。9月下旬から10月は、長雨と台風で悩まされました。在来種と新しい「すずほまれ」の大豆と少しの黒豆を作付しました。大豆は在来種の方が作況が良いようです。やはり在来種は地元で根差して育まれてきたものであることが分かります。

来年もめげず、5月から月に1～2回木祖村に出かけ、笹川さん達との出会いを大切に大豆作りに取り組みたいと思います。

木曾川流域に関わる人々の裾野の拡大に向けて働きかけをしていきたいと思えます。

一緒に、楽しく爽やかな汗をかきませんか。

(楽作隊 近藤 進)

木曾川上下流域での農福 連携に向けての呼びかけ

＜多様な関係を受け止める仕 組みづくりが求められる＞

首都圏（大都市）への一極集中が異常に進む中で、農山村に「関係する」人々の数をいかに増やすかが、今深刻に問われています。その一つの「答え」として、若者の移住・定住促進という「関係の一本道」を歩むような形ではなく、幅広い多種多様な人々が「広場のような空間」「プラットフォーム」でさまざまに関係することが提起されています。

農山村に確固たる意思を持って住み着く人と、「ぶらりと」農山村に立ち寄る人々や、何らかの契機で農業などに関わる人の多様な「想い」や「キッカケ」、「理由」や「事情」を幅広く包摂する考え方や、それを受け止める仕組みが今求められているのです。

農林業に障害者や福祉事業者が関わる、いわゆる「農福連携」の最も基本的な形は、農山村に何らかの障害を持った人々と支援を行う人々が移り住み、農業や林業を生業として行うことだと考えられています。具体的には、福祉事業者が、施設や事業所を農山村に設置し、農業や林業を事業として持続的に行うということなのですが、「設置」や「持続」のハードルはきわめて高く、これらの事業が安定して展開され、結果として定住や移住に結びつくようになるためには多くの困難や障壁があります。

「農」や上流の豊かな自然に関わるこ

とは、障害を持つ人々にとってもいい効果や影響をもたらします。しかし、施設や事業所を農山村に設置し、農業や林業を事業として持続的に行うという「高いゴール」にたどり着くケースはまれです。

障害を持った人々が生き活きと生きていくためには「働くこと」がとても重要です。しかし、働くために必要なのは、個々の就労希望者を一つの「職場」に結ぶことだけではありません。目的は障害者の「働く場＝生きる場」を増やし、「働く場＝生きる場」の環境を変え、働きやすい職場や地域にすることです。障害を持つ人々が生き活きと働ける職場、地域、社会は、高齢者など全ての人々、とりわけハンディがあり「弱者」と呼ばれている人々が生き活きと暮らしていける「場」なのです。

＜共に生き、働く「場」づくり＞

「上流（農山村）」にはそこに住む人々がまだ気が付かない、人々を惹きつける「宝物」が豊かに存在しています。多様な伝統や文化、さまざまな特産物や観光資源、そしてなによりも人々と自然、人と人との強い「つながり」です。これが下流の住む人々が上流に引き寄せられる大きな理由です。

こうした「宝物」と、多種多様な人々が「共に生き、働く」ことを結びつけることが、今問われています。「ゴール」に一気に駆け上がるのではない、いくつもの階段やスロープを使ってゆったり近づいていくことを、「上流（農山村）」と「下流（都市圏）」の人々が一緒に構想できる取り組みを、今後提案していきたいと考えています。希望に満ちた未来、活力に満ちた地域の創造に向かって、共に歩んでいきましょう。

杉戸 孝

（シェアリング・ライフ理事長）



岐阜県七宗町にある「飛水食品」は41号線沿いにあり、美味しいところてん、がんもなどを食べることが出来ます。皆さん、お立ち寄りください。(詳細はみん・みんの会ニュース13号参照)

驚きの日々の中で、地域でどう暮らしていくのか

岐阜県七宗町に地域おこし協力隊として来て2年目、私は「田舎暮らし体験ハウス」という町の施設の管理を任された。都会からの参加者で畑や収穫体験などのイベントを行っている拠点施設が「田舎暮らし体験ハウス」=写真。

ある日、近所の方に「これ、もってけ」と抜きたてのタマネギを手渡された。その熱さに驚き、驚いた自分にも驚いた。日が照る畑に生えていたのだから温かくて当然なのだが、まるで抜かれたことにまだ気づかず、これからも生き続けようとするかのようだった。同様の驚きは、猟師さんが捌いたお肉や、まむしのお腹の中にあつた卵を見たときにも感じた。まだ生命力の勢いが残っているものが日常にあふれていることが新鮮だった。

逆に、それらを駆除したり、食物として提供されるまでのことをこれまで気にも止めず生活していたのだと思った。体験ハウスの管理をしていて、雑草の勢い、虫の増殖、野生動物の賢さ、自分ひとりではまったく太刀打ちできないものたち



に囲まれていることを実感する。そんな中だから、周りの人の助けなしでは普通に暮らすこともできないし、自分が気づいていない所で受けている恩恵を思う。

七宗町の自然や人の中で体感する経験は、ある地域では失われ、またここでも失われていくものかもしれない。地域のどういった姿を大事にしていきたいか、自分が地域にどう関わって暮らしていくかは、人によっても自分の中でもいろんな選択肢がある。

地域おこし協力隊として活動しながら、模索する毎日を過ごしている。

(土屋朋子 七宗町地域おこし協力隊)

～10月9日木曾町バスツアー～

まちの魅力を感じ、楽しみながら共有していく

10月9日木曾町役場に木曾川上流域の人々を中心に22名が集合し、「木曾町を感じ、知り、楽しむ」バスツアーを行いました。今回バスは木曾町が提供していただきました。

はじめに木曾町長の原さんから「木曾の魅力再発見、共有することが大切です」とあいさつ。

その後、JR木曾福島駅の北側の木曾五木の植えられている現場を見学＝写真。ヒノキ、



サワラ、ネズコ、アスナロ（アスヒ）、コウヤマキを観て触って葉を裏返して比べたり香りを確かめたりしました。

「かつては“木一本、首一つ”と言われ木曾の住民は尾張藩の圧政に苦しめられ…という印象を持つ方が多い。確かに木曾五木と樺は停止木（ちょうじぼく）として伐採が禁じられていましたが、立ち入りが禁止された山の面積は木曾全林の7%で山の資源は豊かであった」と木曾町の木村さんから説明を受けました。

また、尾張藩は木曾の人々に1万石のお米を提供し、江戸時代後期には森林の保全・育成に力を入れてきたことにより、現在木曾の美しい森へと受け継がれているのです。

つづいて板倉工法による住宅見学。20坪の

建物は吹き抜けの部分もあり冬でもストーブ一つで全体が温かくなるとのこと。木曾五木が惜しげもなく使われ、木の香り溢れていました。また板倉工法では移築が簡単にできて産廃が出ないことが特徴だそうです。この工法は一般の住宅の3倍の木を使っているとのこと木町の町らしい住宅だと思いました。

木曾・鈴木バイオリン工場の跡地の見学の後「御料館」を見学。

「御料館」は何度か見てきた私でしたが、音楽の世界では有名なバイオリン製作者の陳昌鉉（チン チャンヒョン）さんの紹介展示があり、木曾町にゆかりがある方とこのことで驚きました。

陳昌鉉さんの生い立ちからの漫画も出版されていて、若かりし頃の田中さん（前木曾町長）も登場しているようです。

昼食は「ふるさと体験館きそふくしま」で郷土料理を食べ、体験館の桑村さんから「90年前に地元の方たちが木材を出しあったり協力して黒川小学校を作りましたが、20年前に廃校になりました。その後も地元の人たちがことあるごとに集まる場所となっており、清掃、管理は地元の方たちが行っていました。そして国の廃校活用の補助金を活用して今日のように改修し、15年前から体験館の活動を始めました」と話してくださいました。「体験館」の畑、味噌造り、すんきや五平餅などの郷土食づくり、様々な活動や実績のお話もしていただきました。

その後「体験館」の見学するグループとねずこ下駄の鼻緒を上げる体験グループにわかれ、体験グループは文字通り「悪戦苦闘」。

「体験館」を後に開田高原のおんたけ有機・彩菜館を訪ねました。彩菜館では、すん

きの乳酸菌を使って豆乳のヨーグルトを作っており、興味津津でしたが残念ながら工場はお休み。製造現場は見学できませんでした。松井さんの発酵のお話を伺うことができました。

そして、木曾町役場に戻り散会しました。

木曾町・総務課の方々、案内・ガイドを引き受けてくださった箕島さん、「体験館」の

方々、下駄の体験では「かみむら」さん、お世話になりました。感謝いたします。

今回のバスツアーは、まちの魅力を感じて、皆で共有化しながら磨き方を思い描いていく試みでもありました。今度は下流域からのバスツアーを企画したいと思います。

(事務局 近藤 進)

～木曾町バスツアーを取り組んだ目的とこれからの展望～

“宝物”を発見、磨き、発信する

木曾の地域おこしを考えていく際に重要なキーワードとなるのが、源流地域にとっての「地域資源とは何なのか」ではないでしょうか。今回のバスツアーは木曾町にとっての“地域資源探し”でした。資源には「木曾五木」という“モノ”や「鈴木バイオリン」という“歴史”、ガイドを引き受けてくださった箕島さんや「ふるさと体験館きそふくしま」の桑村さん、そして「かみむら」さんなどの“ヒト”も含まれます。木曾町では当たり前すぎて気が付きにくい“宝物”を上流の人たち自身が再発見することが大きな目的でした。

“宝物”たちは光を当てて磨かなければ錆びついたり埋もれたりしてしまいます。一つ一つの宝物の魅力を掘り下げ、それぞれを繋いで「一つの地図」にまとめられれば、上流から下流への発信力は増します。それが新しい商品・産業を創造し、下流の人びとを引き寄せる（観光など）力を生み、同時に上流に住む人たち自身の誇りの回復・拡大につながると考えています。今回は木曾町でしたが、他の5町村や飛騨川流域でも上流域の人びとと連携し同じような取り組みを始めていきたいと考えています。

他方で下流域への発信を始めることも並行していきたいと考えています。2018年4月上旬に、下流域に呼びかけ、上流域バスツアーを計画しています。そこでの交流を通じて、一つ一つは小さくても、上下流でヒトとモノと情報が循環するしくみを今以上に拡げていければ、未来は決して暗くはないと確信しています。(事務局・鈴木)

崖家づくりの「昔と今と未来」

12月3日(日)に、木曾福島の交流センターで信州大学生による木曾の「崖家づくり」の研究発表がありました。崖家づくりとは1900年頃に木曾川沿いに身を寄せ合うように建てられた木造建築群です。

この崖家づくりの「昔と今と未来」という視点からの発表でした。木曾は山が迫っていて土地がなかった為に、当時の人々が考えて建設した物だと考えられます。今は、バリアフリーといった事が言われたりする生活スタ

イルになった為、間口が狭くて上下に長いこのような建物は問題点も数多くあります。今の建築法では絶対建てる事が出来ない物を、どうやってこれから維持し観光等の“まちの資源”にできないか、古い建物のスタイルを変えないで循環していく事が大切といった視点からの発表でした。

この発表の中で一番気になったのは、現在の居住者からの調査をもとに推定すると、20年後には90%が空家になってしまうかもと

いう点でした。どのように建物を維持し、どのようにして観光拠点にしていくか、皆で考えないと本当になくなってしまいかもしいとの発表でした。



この日の話を聞いていて「みんなの会」の活動とリンクする点が多数あると感じました。我が町を含む上流の過疎は本当に大き

な問題です。人口流出、経済循環等の事を考えると大きすぎて大変難しい問題になりますが、「関係人口」という視点から着目すると出来る事が見えて来るような気がします。「みんなの会」の活動は、上流で大豆を作ったり味噌の天地返しの作業に来ており、すでに木曾の関係人口になって来ています。都会の人達が田舎に来て農業体験をしたりと様々な地域で関係人口が増えて来ていると思います。

「下流の人達が上流へ足を運ぶ」過疎化が進んでる中山間地域と言われる地域に住む我々は、崖家づくりの様な良さを大事にし、下流の人達に足を運んでもらえる様な地域作りをして、出来るだけ多くの「関係人口」を増やす事もこれからのまちづくりには重要なことだと思います。

(小池糰店 唐沢 尚之)

～予約注文・南木曾町つたむらや・どぶろく～

この商品は **1月15日の週に配達します**。ご注文は同封してある「みんなの会 12月注文用紙」に追加でご記入下さい。



木曾広域連合のご紹介で取り扱います。南木曾町で「旅籠つたむらや」をいとなむ伊藤兼彦さん(写真右)が作ったどぶろくです。原料米は伊藤さん自ら棚田で育てたアイガモ米(殺虫剤1回使用)です。

「女瀧」は前年に続き平成29年全国どぶろく研究大会・濃芳醇の部で優秀賞を獲得しました。プチプチと泡立ち、甘く、コクありまろやかな味わいです。

「男瀧」はキリッとやや辛口で、ピリピリと微発泡の刺激とさっぱりした後口が「女瀧」との違いです。

甘目が好きな方は「女瀧」、辛口が好きな方は「男瀧」がおすすめ。

ご注意！冷蔵庫で必ず立てて保存してください。



11	男瀧どぶろく 新発売	¥1800	冷	720ml	米,米糰(共に南木曾),清酒酵母	アルコール分15度 賞味60日
12	女瀧どぶろく 新発売お試し特売	¥1800 ¥1780	冷	720ml	同上	

食べせん！売らせん！作らせん！

知ることから始めよう遺伝子組み換え食品

「第13回 GMOフリーゾーン全国交流集会 in 東海」が、2018年3月、名古屋市で開催されます。「GMOフリーゾーン（遺伝子組み換え作物を栽培させない）運動」は1999年にイタリアのワイン農家から始まりました。いまでは世界中で農家や消費者・市民たちがこの運動を広めています。

愛知県では、かつて愛知県農業試験場で行われたモンサント社の遺伝子組み換え米「祭り晴れ」の試験栽培に反対し、栽培試験を止めました。さらに、全国に先駆けて遺伝子組み換えナタネ自生調査を行うなど、生産者と消費者が手を組んだ運動が活発に行われています。また、有機栽培や大豆畑トラスト運動も着々と進められています。この東海地域に初めて全国から集まり、生産者と消費者・市民が経験を語り合い交流を深める集会です。

みんなの会も in 東海実行委員会に加わって皆さんと共に、集会を準備してきました。参加自由です。是非、参加しましょう。（水原 博子）

○とき：2018年3月3、4日 12時30分開場 13時30分開会

○ところ：名古屋栄 東急REIホテル2Fオークルーム（名古屋市中区栄3-1-8）

☆今年も皆さまのご支援、お力添えのおかげで、1年間様々な取り組みを行うことが出来ました。ありがとうございました。2018年もよろしくお願ひします。☆

2017年に木曾川や飛騨川の上流域に出かけた回数を調べたら、20回を超えていました。小中高生と一緒に水質調査・水生生物の観察、各地のお祭り、木曾青峰高校インテリア科3年生の木製玩具づくり、木曾町の魅力・宝物さがしのミーティングやバスツアー、木曾音楽祭や木曾手仕事市のイベント、大桑村や上松町の首長の方々にお会いした「キャラバン」、地域おこし協力隊の人びと、上松技術専門校訪問、そして大豆づくり・味噌造りなどなど、魅力あふれる上流域の人びとと出会い、交流できたことに感謝しています。

2018年もよろしくお願ひします。（河崎）

☆☆☆第8期木曾川流域

水源の里基金へ募金の

ご協力をお願いします☆☆☆

<郵便振込口座>

口座番号； 00810-1-158556

加入者名； みんなの会

（水源の里基金と記してください）

水源の里を守ろう

木曾川流域みんなの会

☆共同代表☆

河崎典夫、伊澤眞一（名古屋生活クラブ）

☆顧問： 斎藤まこと（名古屋市議）

山根みちよ（日進市議）

☆連絡先☆ 〒464-0075

名古屋市千種区内山3-7-11 斎藤事務所 気付

TEL 052(745)1001 FAX 052(741)2588

HP: <http://www.kisogawaminmin1.net/>

e-mail: suigennosato@gmail.com